

シア語民族 (*barbaroi*) であるトロイア人を前にして戦争をしているギリシア人、つまり悲劇作者たちが使った語彙に従えば、*θῦσαι ἄ χρή, δρᾶν ἄ χρή* を共有する人間たちを指揮しているのだ、という視点から判断せよ、と迫ったというのが、ふたりの言い争いの根本的な構造であろう。

上のような説明はあるいは文化人類学を経た近代的な知性によるまとめかたに過ぎるかもしれない。オデュッセウス自身の語彙に従って、彼の主張を整理するならば、彼の比較的長い説得文 (1332-1345) と、それに続くスティコミュティアによる論争 (1346-1369) での彼の語彙の偏りを次のように簡単に指摘すれば、オデュッセウスの主張を浮き彫りにするのに足りるように思う：神の秩序 (*τοὺς θεῶν νόμους* 1342)、その下に成立する人間たちの世界の正義およびその系列語 (*τὴν δίκην* 1335, *ἐνδίκως* 1343, *ἄνδρα δίκαιον* 1344, *ἄνδρας ἐνδίκους* 1363)、それに従う形で成立する人間の行為に対する「よきこと」「よきひと」という判断 (*τὸν ἐσθλόν* 1345, *καλόν* 1347, *τοῖς μὴ καλοῖς* 1349, *γειναίος* 1355)、そしてそういう判断と一体の形で成立すべき敵・味方の区別 (*ἔχθιστος* 1336, *τοῖς φίλοις* 1351, *ὄδ' ἐχθρός* 1355, *τῆς ἐχθρας* 1357, *φίλοι* 1359, *φιλῶ* 1361)。彼の主張の基調はこの異常な語彙の偏りから明らかであろう。

アガ멤ノンは、実は、最初のオデュッセウスの「演説」(1332-45)を聞いた時点で相手の論理にほとんど説得されてしまっていたのだ：*τόν τοι τύραννον εὐσεβεῖν οὐ ῥάδιον* 「いやまったく、王にとって神の秩序に従うのは容易ではないな」(1350)。ひとつの共同体の支配者は、当の共同体を支えている社会の論理に従わざるをえない。アイアスがやったことをどれほど個人的には苦々しく思っている、である。アガ멤ノンはオデュッセウスの論理に屈服しなければならないことを、論争のはじめから覚悟していたということをこの発言は示している。

なぜか？オデュッセウスは、個人としての一時の感情ではなく、彼ら(この彼らを特定することはここでは試みない。とりあえずは、ここで議論しているふたりが属している社会の人間たち)が共有していたはずの社会行動上の原理あるいは規範に従えという、正気な人間なら抗うことの出来ない説得の論理をここで駆使しているからだ。アガ멤ノンのオデュッセウスに対する抵抗はもともと勝ち目のない議論なのである。アガ멤ノンがオデュッセウスの説得すること(アイアスの死体の正当な埋葬)を、*ἄ χρή* 「(人間ならば)せねばならないこと」と自ら規定したうえで、屈服する(1373)のはある意味では、論争が始まった時点で決まっていたことを確認したにすぎないともいえるだろう。

Dindorf 以来採用されてきた読み替えは、アガ멤ノンの屈服を、オデュッセウスに対する単なる好意の付与を意味するものだと⁽⁹⁾、読ませかねないものであり、そういう意味で二人の論争の枠組みを見えにくくしかねないものである。そして、先の「大袈裟な」指摘をもう一度繰り返せば、ギリシア悲劇をより正確に時代に即して読むことを可能にするてがかりを、私たちの目から隠しかねないものなのである。

(北海道大学)

(9) もちろんそういう含みも明かにある。1371 参照。だから、本稿の主張は、好意の付与だけだと読めば、大事な点を見逃すことになる、という主張になろうか。